

## 外から東アジアを見る視点

爨 殿武

僕が日本に来て丸一五年になる。最初は、多少のカルチャーショックを受けたはずだと思うのだが、今ではそれが何であつたかとも思い出せないほど、この社会と文化に何の違和感も抱くことなく毎日暮らしている。日本へ来る前、中国の大学で日常会話に不便しない程度の日本語を修得し、日本のラジオや当時流行の歌謡曲を積極的に聴くなどして、どん欲に日本文化を吸収してきた成果だろうか、日本に来た当初から、異文化生活における特有の疎外感や異質感を覚えなかつた。いま思えば、自分の中では最初から「外」から日本を見る視点が欠けていたかもしれない。

このように書くと、僕が異文化に対する順応性が高いかのような錯覚を与えそうだが、残念ながらそうではない。大学院卒業後、生まれ育つた中国の天津を就職のために離れ、短い期間だったが、広州に住んだことがある。列車の三等客車で二日間かかった長旅を終え、広州駅に降り立った瞬間、声高に話す地元の人と覚しき男女の会話も、食料品の売り子のかげ声も、自分と同じ中国人であるはずなのに、彼らの話す広東語を何一つ聞いて理解できないという、恐ろしい経験をした。ひと通りの広東語を覚えるまで、売店では買いたい物を指でさし示し、欲しい数だけ指を出す、お使いを頼まれた子供のような行動をしていたのも、恥ず

かしながら懐かしい思い出である。見るもの聞くものすべてが新鮮で、毎日が発見の連続だった。

日本へ来た当初も、そのような心おどる経験がたくさんあったと思う。だが一年、また一年と月日を重ねていくうちに、あたりまえのように過ぎていく日々を追われ、異文化に対する新鮮な感覚を失いかけていくような気がする。

先日、出張で中国の大連へ行く機会があつたのだが、搭乗スケジュールの都合により、成田からいったん韓国へ向かい、そこで大連行き便に乗り換えるルートの利用となつた。今まで、パスポートに日本と中国の出入国記録しかなかった僕は、生まれて初めて大韓航空機に乗り、韓国の仁川国際空港に足を踏み入れることとなる。仁川国際空港は、最近たびたびマスコミを賑わすアジアのハブ空港である。この旅は僕にとつて、久しぶりに短期間に日本、中国、韓国を比較しながら観察し、また異文化を体験するチャンスとなつた。

飛行機が成田国際空港を飛び立つと、近景に点在するゴルフ場の薄いグリーン芝生と木々がまるで盆栽のように見えるが、高度が上昇するにつれ、森や田園の緑に覆われる房総半島が眼下一面に広がり、波のしぶきが海岸線の白い輪郭を画く。碧い海が夕日の中で黄金のように輝いている。

飛行機が暗闇を後にして夕日を追いつながら紫色の空を飛んでいる。長身で淡いブルー色の制服をまとつたCA（キャビン・アテンダント）の女性がせわしく行ったり来たりして、機内サービスを始めた。昔の女性のかんざしの形を思い出させるような髪飾りがCAの動きとともにいつそう目立って見えた。僕の隣はインド人と西洋人、前は日本人、後は韓

国人で、偶然にも狭い空間の中で確実に東アジアの国際化の現実を再現している。大韓航空のCAは韓国語、英語と日本語で、テキパキと客の要望に答えている。きれいな英語と少し特徴的なアクセントのある日本語が対照的で、逆に新鮮に聞こえる。待ちに待った機内食が運ばれてきた。日本から出発した大韓航空の飛行機なのに、食事が何となく中国の味付けやスタイルに近いのは意外であった。

いつの間にか韓国の仁川国際空港に近づいてきた。機内放送を聞かなくても肉眼で確認できる。大小無数の電気が燦々と輝き、光の海を編み出している。光を見つめれば、仁川国際空港は大型船舶の帆をイメージした柔軟なリズム感、そして芸術的造形美を取り込んだ外観が目に見え込んできた。光の海の輝きを脳裏に焼き付けたまま、いざこの巨大な空港に降りたとたん、今度、柔らかいイントネーションの響きを持つ韓国語の海に飛び込んだ。乗り継ぎの時間が短いため、焦る気持ちを抑えながら、標識を頼りに手続きのカウンターを探そうと足を速めた。しかし、仁川国際空港はとてつもなく大きい。乗り継ぎカウンターは「から」までである。電車でターミナル間を移動して、さらに「回」ほど訊ねて、ようやく目当ての手続きカウンターまでたどり着いた。道のりが長かったが、手続きに要する時間は短かった。これでやっと無事に次の飛行機に乗れる。

落ち着いてこの巨大空間を観察してみると、至る所に大韓航空のイメージカラーである淡いブルーに彩られている。それは、成田国際空港のしゃれた紺色と対照的である。一方、北京国際空港で人々の目を引いたのは鮮やかな黄色と金色である。イメージカラーはそれぞれ異なるが、東アジアで共通して好まれる色はむしろ赤ではないかと思う。日本

は白と赤、韓国は淡いブルーと赤、中国は黄色（金色）と赤、それぞれの組み合わせを好んで使っている。

オリンピックのあと、仕事で幾度も北京国際空港を利用したが、その度にいつもその巨大さに息を飲んだ。この空港は、英国人建築家の設計で、中国文化の象徴である龍の形を模していて、龍のうろこのような天窓から自然光を取り入れ、エコの観点から現在の時代にもふさわしい建築物である。もちろん、中国の威信をかけたプロジェクトとして、世界一の規模を誇っている。

北京に滞在する間、タクシードで天安門広場を通り過ぎた。今年の中国建国六〇周年記念式典の映像で見られた五六本の「民族団結の柱」を目にした。巨大な朱塗りの柱に金色の装飾、いかにも中国人好みの彩りである。二〇〇八年はちょうど中国の改革・開放三〇周年にあたる。三〇年の間に、中国は確実に変わった。まるで天地の変わりのように激変した。特にここ十数年の激変ぶりは目を見張るものである。都会には高層ビルが建ち並び、夜のダウンタウンはネオンであふれ、昼間以上に明るい。旅行社のガイドやタクシードの運転手も誇らしげに最近の変化ぶりを自慢した。昔の北京を知る人なら、その自慢話を大げさだと思わない。

二〇世紀に急激に進んだ西洋文化の流入と科学技術の発展によって、東アジアにおける生活方式と芸術は、それまでの自らの伝統と遠く離れてしまうという傾向が生じた。しかし、経済的成長を遂げつつある現在の東アジアはそれぞれのイメージカラーでその美しさを表している。思えば、かつては中国の長安は美の十字路にあり、唐の時代に東西交流を通じて異民族文化と衝突し、また融合することで成熟し、中国文明史上ひとつの頂点に達した。それが朝鮮半島、日本に伝わり、東アジアの文

化的特徴を作り上げた。近代に入ってから、時間的な縦軸と地理的な横軸において、日本は東アジアの国際交流および東西文化融合の先導的役割を果たした。現在、東京、ソウル、北京、上海、台北、香港、北から南にわたって、東アジアに巨大な国際都市が誕生した。これらの国際都市は競いながら、それぞれのイメージカラーを作り出しつつある。

今は情報化の時代に入り、電話、ファックスからメール、インターネット電話 (MSN、SKYPE) へと、コミュニケーション手段は格段に進歩し、人間と人間の交流の方法も多様化している。昔のことわざに「秀才は門を出でずして、天下の事を知る」というのがある。つまりいにしえの秀才(科挙試験の合格者)は、自分では何一つ知らぬことはいと考えていた。今の世の中はまさに「門を出でずして、天下の事を知る」時代である。情報化社会の技術革命の恩恵にあずかり、私たちは、テレビやインターネットを通じて、世界中の出来事をリアルタイムで知ることができる。しかし、デジタルの時代にアナログ的な交流も依然として重要だと思う。インターネットやメールなどの情報手段がどんなに進歩しても、膝をつき合わせて話し合ったり、テーブルを囲んで一緒にご飯を食べたりすることは、やはり大切である。今年の出張のおかげで、所詮人間は感情の生き物であると、しみじみ感じた。同時に、居間にながらして「門を出でずして、天下の事を知る」時代に生きても、私たちは海外へ行き、自分の目で世界を確かめたり、自分の心で世界を感じたりして、経験知(暗黙知)を得ることが必要ではないかと思う。

特に、日本文化の特徴を外の目から見直すことを趣旨とする国際日本学の講義を担当しているいま、外からあらためて日本のみならず、東アジアを見る視点を持つべきだと痛感している。今年の数回の短い出張が

はからず外から東アジアを見つめる機会を得た貴重なものになったと、心の中で感謝している。

(らん でんぶ・本学国際人文学部国際交流学科准教授)

